

令和7年度文部科学省委託事業

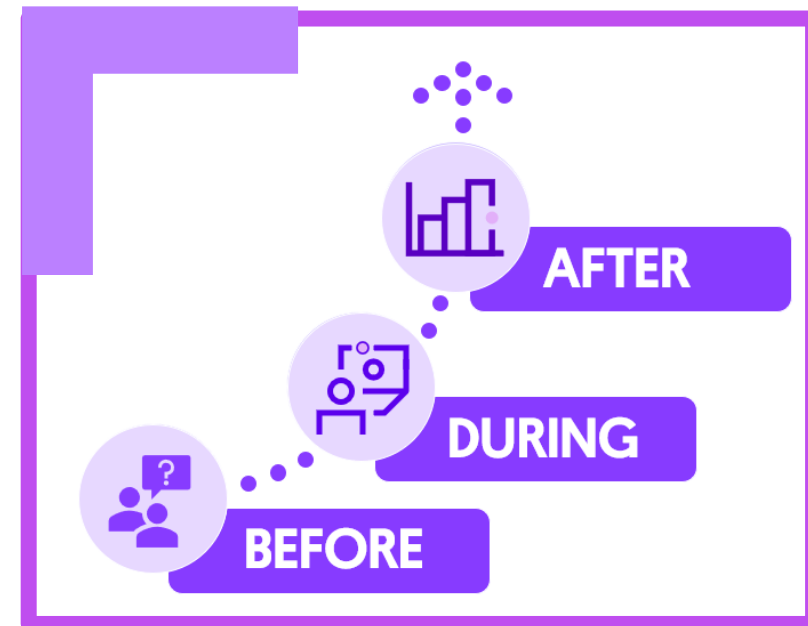
教師の英語力・指導力向上のための実践的オンライン研修 中・高等学校教師プログラム

Online course for Teaching English (OTE)

報告書(抜粋版)

目次

- 研修概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- 話すこと[やり取り]の指導： 成果と研修内容抜粋・・・・・・・・3
- 語彙指導： 成果と研修内容・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 書くことの指導： 成果と研修内容・・・・・・・・・・・・9
- 教師の英語使用の量と質・・・・・・・・・・・・・・・・12
- 成果と教師も生徒も豊かに英語を使うための手法・・・・・・・・13
- 教師の知識と自信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
- 話すことと他の技能との関係： 技能間の影響を実感・・・・・・16
- 科学的根拠を踏まえた研修デザイン・・・・・・・・・・・・17



詳細版(含む研修内容)はこちら↓



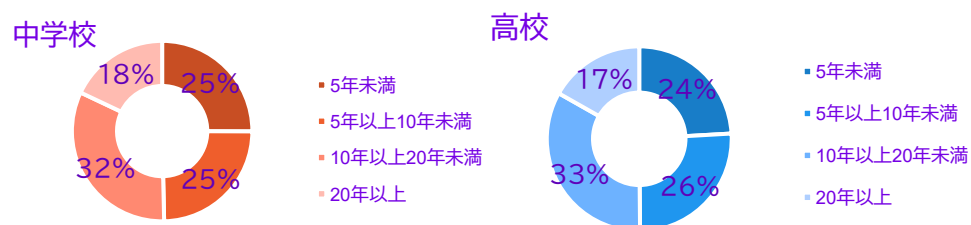
詳細版では、

- 【受講前】にどんな課題をもっていたか、
 - 【受講中】どのような研修に取り組んだか、
 - 【受講後】どのような変容が見られたのか、
- をテーマ毎に概観しています。

研修概要

受講者数 合計780名
・ 中学校 423名(内訳:公立399名、国公立大附属7名、私立17名)
・ 高等学校 357名(内訳:公立299名、国公立大附属4名、私立54名)

経験年数 受講者の指導経験は幅広く、10年以上の経験者が半数。



研修は役に立った
98.4%

修了率 95%の受講者が全研修を修了

- 高い修了者の98%が「役立つ研修だった」と評価。オンラインによって、新たな学び(知識)と具体的で実践的な手法(指導方略)を得て、授業実践や省察を促したことで、教師の意識変容と生徒の態度変化が報告され、非常に成果が多い研修となりました。(話すこと・語彙・書くことの指導→スライド3-11)
- 「授業中の教師の英語割合50%以上」は、**中学校で研修前53%から研修後66%、高校で39%から48%**、生徒の言語活動の時間も中高とも10ポイント以上増加。→スライド12-14
- 「やり取り指導の支援方法に対する理解」は、事前46%が事後78%(中高平均)と大きく向上。教師の指導に対する自信も大幅に変化しました。→スライド15
- 話すことを中心とした統合的な指導によって、生徒の英語力の総合的な向上を実感。**話す活動が「他技能を伸ばす媒介」**となることが示されました。→スライド16
- 効果的なオンライン研修の要素についても特定が進みました。→スライド17

スピーキング・語彙・ライティングの3分野、
総時間は10時間。

6月



モジュール1:
話すこと[やり取り]の指導



モジュール2:
話すことの指導



モジュール3:
新出語彙や表現の指導と
練習



モジュール4:
書くことの指導

研修と授業実践の継続

1月

モジュール1はリアルタイムで行う同時双方向型のワークショップで、英語指導の国際資格と日本での教員研修に経験豊かな講師によるデモ授業を体験。

モジュール2以降は、オンデマンド(eラーニング)で、第二言語習得、動機付け、学習科学など、妥当性のある科学的根拠に基づいた効果的な指導法と、それを行うべき理由や効果の理解を深めました。

話すこと[やり取り]の指導

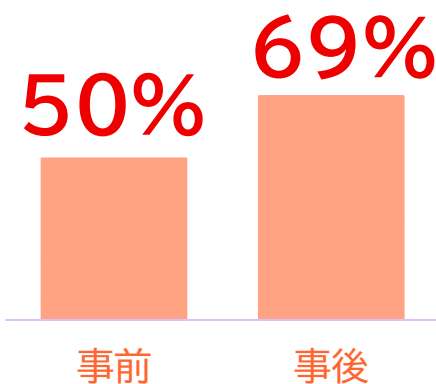
- ❖ 英語でやり取りする機会を意識的に増やす実践が多く見られました。「表現の練習」「モデル対話の提示」「相槌やフォローアップ質問の提示」など、教師の足場かけによって即興でのやり取りが実現可能であることが認識され、段階的な工夫が広がりました。
- ❖ 「準備された発話」から「即興的なやり取り」へと移行し、従来はワークシートやモデルに依存していた活動が、対話へと変化しました。
- ❖ 発話機会が増加し、習慣になったことで、生徒の心理面の変化も多く報告されています。発話への心理的ハードルが下がり、正確さありきではなく、伝えようとする行動の変化が見られました。単語レベルから文レベルへと移行する過程が丁寧に捉えられました。



- 毎時間やり取りをすることで、生徒たちはワークシートを見ないで発言する習慣がついてきた。(中学校)
- 細かな足場かけをすることで、生徒たち自身に英語力の向上を実感させることができる、と本研修で学ぶことができました。(高校)

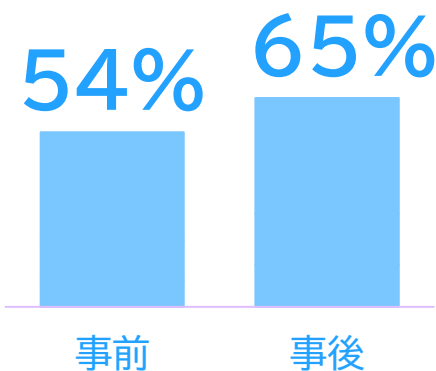
中学校

ワークシート等を使わずに即興で話すようにしている（やり取り指導の実践）



高校

授業中、生徒が英語でお互いに話す機会をたくさんとっている（やり取り指導の実践）



(6段階で4-6を回答した割合)

話すこと〔やり取り〕【中学校】 スモールトーク 7つのステップ

「スモールトーク」活動は、短時間で頻繁に実施することができます。その実践例として、師によるライブのデモ授業と指導技術の練習を通して、「7つのステップ」をご紹介します。

ステップ1と2：何をどんな風にできるようになってほしいかという期待値を明確に示します。

ステップ3：生徒が自分の意見や経験を表現するために準備時間をとります。

ステップ4：書かれたものに頼らず、即興で話すことができるようにサポートします。

ステップ5：ペアで取り組むことで、生徒全員の活動機会を最大限確保し、心理的安全性にも配慮します。生徒がやり取りをしている間、教師は教室を回り、ペアの会話を聞きながら改善すべき点を確認します。

ステップ6：教師がクラス全体に向けて即時フィードバックを行い、生徒が自力では言えなかった有用な表現などを伝えます。

ステップ7：新しいパートナーと活動を繰り返すことで、生徒はすぐにフィードバックを活かすことができ、この部分は上達に向けて欠かせません。

【7つのステップ】

1. テーマを設定する
2. 会話のモデルを示す
3. 考える時間を設ける
4. 質問文を練習する
5. 生徒をペアに分ける
6. 観察し、フィードバックを与える
7. パートナーを交代する

- 今までのsmall talkは、生徒にトピックを見せた後、自身の答えを伝え、その後に生徒同士で聞き合う流れでした。しかし、7つのステップ通りに進めると、生徒の聞く姿勢や理解度がより深まりました。
- フレーズを塊ごとにリピートすると、生徒にとっては定着しやすく、覚えやすいです。スモールステップで、基本を伝えてから、話す元となるインプットとそれを繰り返し練習することが大事であると改めて気づきました。
- 会話例を示すことで会話の流れ、切り返しの仕方が生徒にわかりやすくなり、会話例を示していなかった以前より会話が続くようになりました。

話すこと[やり取り]【高校】 ディスカッション活動のプロセス

研修内容抜粋

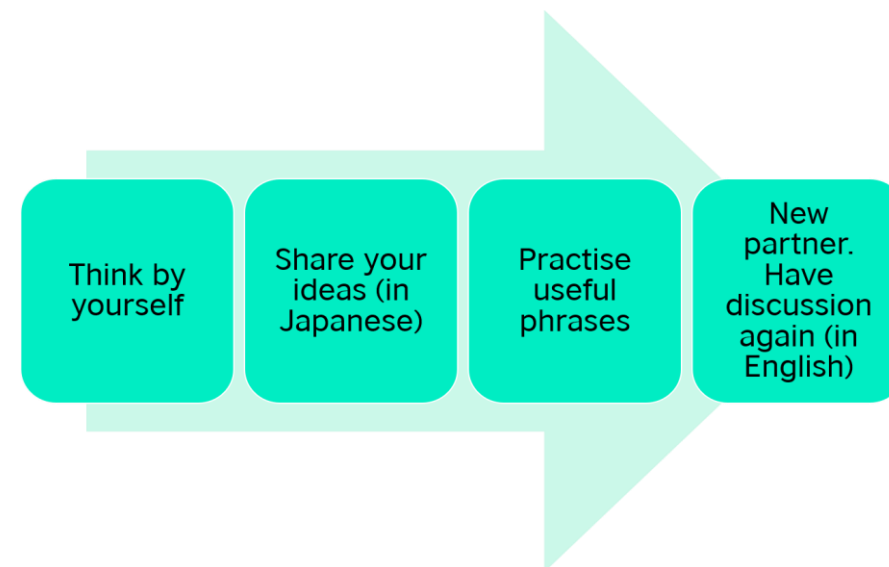
モジュール1のワークショップでは、読解で取り上げた題材を元にした、ディスカッション活動を紹介しました。

- ディスカッションとリテリング活動の違い：リテリングは、読んだテキストにある単語や表現を思い出しながら行いますが、ディスカッションには、話の主導権を交代するターンテイキング、質問をする、他者の意見に反応するなどのコミュニケーション方略の理解と様々な語彙や表現(機能言語)が必要です。
- アイデアを引き出したり、会話を広げる等の表現を導入する際には、生徒が言えるようになるための支援が必要です。練習するための効果的な技法として、back-chainingやfinger drillsなどの手法を実演しました。

(参考)指導動画:ディスカッションの力を育てる段階的支援(7分45秒)
(ブリティッシュ・カウンシル作成)



- 研修では、ディスカッション活動を構築するためのプロセス(右)を紹介し、日本語と英語の使い分けのポイントについても扱いました。



- 自身の考えをまとめる時間を取り、その後ペアで考えをシェア、ペアを変えて再びシェアを続けるという形でディスカッションを進めた。回数を重ねるごとに、生徒はだんだんと自信をつけ、スムーズにディスカッションを進められるようになっていった。
- 意見の言い方(意見・理由・具体例)の型を与えることで表現が苦手な生徒でも言うことができた。
- 話し合いに向けた背景知識を導入したり、事前に意見を書き出させたり、有用な表現のリストを配布し練習したことで、全員の生徒が議論に参加することができた。

語彙指導

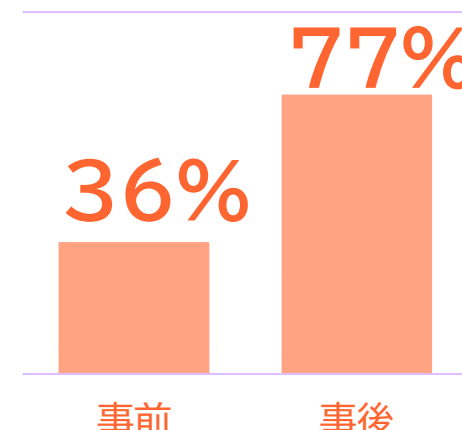
- ❖ 研修後は、語彙指導の目的が大きく変化し、暗記中心から、「活動で使う」「発話や作文につなげる」など、使うことを前提とした指導へと移行しました。
- ❖ 記憶のしくみに基づいた指導(学習科学)の理解が広がり、「一度教えて終わり」ではなく、「時間をおいて再び触れる」「繰り返し使う」といった定着のプロセスを意識する実践が増えました。「どのタイミングで語彙活動を入れるか」という授業設計の視点も強くなりました。
- ❖ 実践的な手立ての導入により、生徒の語彙に対する意識にも変化があり、生徒の発話量や表現の幅が広がったとの報告が多くありました。
- ❖ 語彙を「教える」から、「学習方略を指導する」視点も見られ、より自律的な学習への移行が認められました。



- ・ 記憶に残る語彙導入の方法が分かった。(中学校)
- ・ 語彙の習得の手順について見直したことで、授業づくりが改善された。(高校)

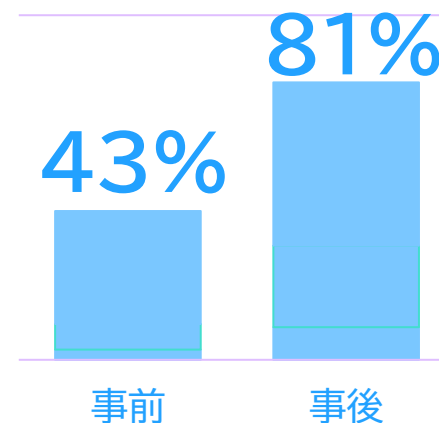
中学校

記憶のしくみ、生徒の記憶に残る新出語彙の導入や支援のしかたについての十分な理解(教師の知識)



高校

記憶のしくみ、生徒の記憶に残る新出語彙の導入や支援のしかたについての十分な理解(教師の知識)



(6段階で4-6を回答した割合)

新出語彙や表現の指導と練習【中高】 学習科学を踏まえた生徒への支援

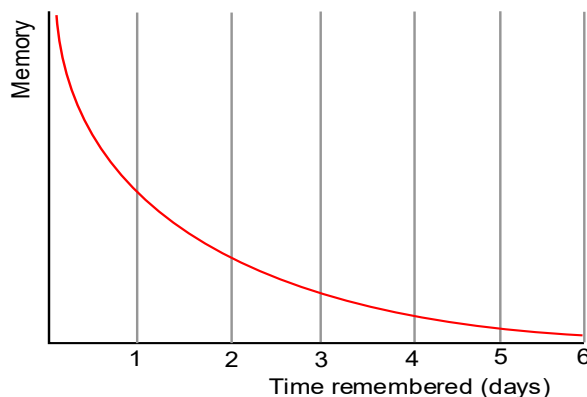
研修内容抜粋

語彙の研修では、エビングハウスの忘却曲線と、「想起とアウトプットによって、長期記憶への定着を促すことができる」という学習科学の基本を確認しました。

新しく何かを学んでも20分後にはその約4割は忘れてしまいます(下図*)。学習しても使い続けなければ記憶から消えてしまいますが、記憶は学習したことを何度も呼び出す(検索)、思い出そう(想起)と努力する機会があると再構成・強化・保持されます。

そこで大切なのは、機械的な反復練習ではなく、多種多様なアプローチを使い、生徒が覚えられるように教師が支援することです。

生徒の長期記憶への定着を支援するため、長期記憶に貯蔵した既習語彙を思い出し(想起する)、記憶を強固にする活動として、「間隔を空けて行う反復学習」の意義を扱いました。また、手軽にできる様々な語彙活動も紹介しました。



* https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Forgetting_curve_decline.svg Creative commons licence.

本研修では、語彙学習を「生徒個別に家庭で行う活動」から、「教師が授業の中でモデルを示し、強化・促進できるもの」として捉える意識改革を目指しました。これにより、生徒が学習において具体的かつ目に見える形で向上を実感できるように支援できます。

想起学習・分散学習を組み合わせた Simple recall

- 新出語彙を導入した後、個人やペアで、どんな単語を覚えているかを確認させるように指示します。少し時間を空けて、授業終了前や次の時間でも同じように活動します。
- これは授業のどんな場面でも、短時間で実施できるだけでなく、とてもパワフルな活動です。
- 生徒は、自分が覚えられたことを実感でき、recallの活動があると生徒の集中度が上がるという報告もあります。
- この場合、思い出そうという認知的努力が重要です。教師は、生徒の様子をモニタリングをすることで、覚えていない単語が把握できるため、必要に応じて再指導できます。

学習科学を踏まえた語彙指導の実践【中高】

研修内容抜粋

【中学校】では、新出語彙の多くは読む活動で導入されるため、生徒の認知的負荷に配慮した、新出語彙の数を限定する方法を扱いました。また、発音と綴りの両方を印象づけるアプローチ、様々な語彙活動についてもご紹介しました。

- 今まで電子教科書で本文を見せ内容理解を行っていましたが、興味を持つことは少なく発話もあまりありませんでした。しかし、絵や写真、ジェスチャー等で単語や本文内容を教えると、視覚的にイメージすることができたようで授業態度の変化も見られました。
- 限られた時間でも効率的に語句の提示を行うことができた。イラストを活用したことで、単なるインプットに留まらず、生徒がアウトプットを行ったり他の語句と関連付けて学習するなど、より深い学びを実現することができた。これにより、生徒の語句の定着や活用力の向上につながったと感じている。
- 研修で習った一連の活動は、マンネリ化しつつあったこれまでの授業からの脱却を図る上で、非常に有効で、生徒の学習モチベーションを高める上でも、大きな成果が得られた。英語学習に苦手意識を持つ生徒にとって、ピクチャーやジェスチャーを取り入れたゲーム感覚のインプット方法は、非常に有効であることが分かった。これらの活動によって、生徒たちは抵抗感なく積極的に学習に取り組めると同時に、単なる語彙力の強化に留まらず、4技能の向上にもつながっていることを実感した。
- 文字は記憶のためには重要な道具であり、且つ、アルファベットは表音文字であるので、フォニックスのような綴りと音の関係に関する内容は有効であると感じた。

【高校】になると語彙は抽象的なものが多く、多音節の長い単語も含まれますが、丸暗記は科学的ではありません。言葉を理解し、関心を高めたり印象づけたりすることで覚えやすくなり、その方略を教師がやって見せることで、生徒が自分で語彙を増強する際に応用できるようになります。

- 生徒は接頭辞や接尾辞に着目して語彙学習をする意識が高まり、定期テストの間違い直しでは、接頭辞等を調べて解説に書き加えている生徒も見られた。
- 既習単語を想起する活動を行った時、「あれ、なんだっけ？」と言う生徒が多かった。機械的に発音したり文字を眺めていただけだったことに気づいた生徒もいた。機械的な発声から覚えるための発声へ変化するいい活動だった。
- 語彙指導で大切なのは「変化」と「繰り返し」。変化とは、マンネリ化した語彙学習に今回学んだような新しい教授法を取り入れることで生徒の注目をひくことだと思う。繰り返しとは、エビングハウスの忘却曲線から学んだように、いかに忘れてしまうのを防ぐか、どのタイミングで再度取り組ませるか、その仕掛けが大切だと学んだ。
- 想起練習を教師主導ではなく、生徒主導で、ペアワークで生徒がやるようにしています。「学びのオーナーシップ」が生徒にある状態が実現し、「教えてもらう」より「自分たちで学び取るんだ！」という姿勢の育成に効いていると思います。

書くことの指導

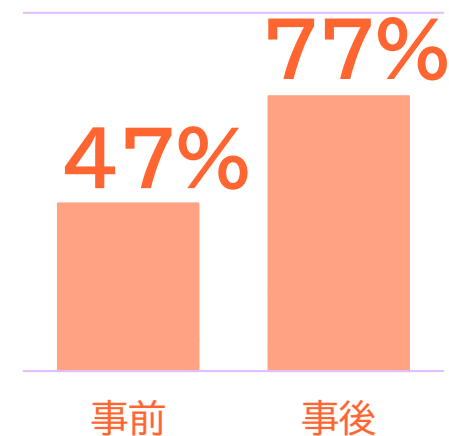
- ❖ 「いきなり書かせる」から「段階を踏んで書かせる」指導へ転換しました。モデルを示したり、話す→書くにつなげることで、取り組みやすくなったという声が多くありました。
- ❖ 目的・場面・状況に加え、読み手の提示を意図的かつ具体的に、「ルーブリックで書くべき要素を示す」など、活動の意図を生徒に理解させる実践も増加しました。こういった支援により、書く行為に“意味”が生まれ、質と意欲が向上しました。
- ❖ 個別対応と全体共有の使い分けなど、フィードバックの進め方と重要性への理解が大きく進み、「書かせて終わり」にしない意識が高まりました。



- 段階的に指導することで、書く活動に取り組めるようになってきた。(中学校)
- 翻訳サイトや生成AIに丸投げして、自分の英語レベルでは到底使えないような表現や、教師すら知らない表現を用いた原稿を出してくる生徒がかなり減りました。(高校)

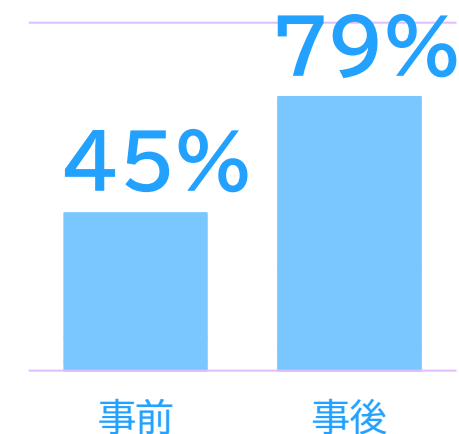
中学校

活動の観察、全員が課題を完了できるための支援やフィードバックについての十分な理解(教師の知識)



高校

活動の観察、全員が課題を完了できるための支援やフィードバックについての十分な理解(教師の知識)



(6段階で4-6を回答した割合)

書くこと【中高】 プロセスモデル

研修内容抜粋

モジュール4「書くことの指導」では、一文単位の短時間でできる活動から、まとまりのある文章作成まで、様々なレベルの活動を紹介しました。

「一文からできる活動」やパラグラフ単位の活動は、指導の焦点が明確で、授業中に定期的に取り入れることができます。また、授業中にフィードバックを行うことも可能です。教師の業務負担を軽減しつつ、生徒が正確な文章を流暢に書けるようになる基礎固めを期待しています。

さらにまとまりのある文章を書けるようになるための支援として、「プロセスモデル」(下図)も扱いました。事前活動でのブレインストーミングやスピーキング活動の役割、下書きのプロセスなど、**すべての生徒がタスクを完了できるように、個々のステップでつまづきを回避できる十分な支援を提供します。**

「似ているが異なる」モデルを活用すれば、生徒は文章の質を向上させることができるだけでなく、**有用なライティング方略も学ぶこともできます。**生徒がそれぞれの経験を活かして自分の考えを表現するための柔軟な指導ができる余地もあります。



- 例文を提示し、文法内容を確認しただけではうまく英文を書けなかった生徒がいましたが、しっかり口頭練習とオリジナル文の発話を行わせることで、自信をもって書けるようになりました。また早く書けた生徒が他の生徒にアドバイスする姿も見られ、協働的な学習になったと思います。(中学校)
- 話題に対して、選択肢があるというのは、非常に効果的だと感じました。生徒が自分で選んで書くので、受動的ではなく、能動的に行っていたと思う。それが、グループ交流でも協働的に行うことにつながった。最後の完成に向けて、生徒は「脳動的」になっていたと思う。(中学校)
- 各プロセスで集中すべき焦点を絞ったことで、生徒は「自分の力で書いている」という実感を持ちやすかったようだ。書く前に英語で言うステップを入れたことで、自ら補うべき表現に気づくことができた。結果としてICTの翻訳機能に全面的に頼るのではなく、まずは自力で書こうとする「補助輪を外した」状態でライティング活動に取り組ませることができたと思います。(高校)
- それまで手順を意識せずにWriting Taskを課してきましたが、今回学んだ手順を意識して進めたところ、生徒たちはよりスムーズに文を書くことができていました。特に、自分の意見を出す場面でなかなか思いつかなくて止まってしまう生徒も少なくなかったのですが、生徒に考える時間を十分にとって日本語でシェアする段階を入れたら、詰まることはなかったです。(高校)

書くこと【中高】 課題のプロンプト・評価ルーブリック

表現力や思考力を高めるためには、多様なライティング課題に触れることが必要です。そのために、賛否を問う文や意見文、電子メール以外に、観光ガイド、オンラインのレストランレビューなどの課題を紹介しました。また、コミュニケーション能力と課題達成度を考慮する評価基準を紹介し、その使い方についても紹介しました。

以下は、「外国の友達に短いメール文を書く」タスクのプロンプト(指示文)と評価基準例です。

【プロンプト】

Task: Write a short email to a foreign friend about your favourite food.

You should say:

- what you like
- why you like it
- when you usually eat it.

You should use:

- at least 30 words
- 'and' and 'because' to link your ideas.

• プロンプトとは

生徒から英語表現を引き出す指示文のことで、どんな英語を、どのように、どれだけ産出すればよいかという情報が含まれます。生徒にとって理解が簡単で、どんなライティングが期待されているかをわかりやすく、効果的に説明する必要があります。

【評価基準】

1. Task Achievement 課題の達成度 : 課題の要件を満たしているか
2. Accuracy 正確さ: 正しい綴り、句読点、語彙の選択、文法について
3. Range 幅: 生徒のレベルに適した、幅広い語彙や文法構造を使っているか

【採点】

A = can do it well

B = can do it but it's a little difficult to understand

C = can't do it yet

- 評価基準を明確にすることの大切さを改めて感じました。ただ書かせるのではなく、その活動に意味はあるのか、生徒にとって意義あるものなのか、まずは教師自身が自分に問う必要があります。書くことが苦手な中学生はとても多いですが、「書きたい！」と思わせるような問いや授業展開、学習方法の提示などの工夫が必要だと学びました。(中学校)
- 生徒が困らないように語数を指定したり、ルーブリックを生徒に提示したりと、評価を明確にすることは教師が評価しやすくするためではなく生徒にとっても取り組みやすいのだと学んだ。(中学校)
- 評価をどのようにするかでいつも悩んでいたが、今回の講座でどのような視点でどう評価していけばいいか、そしてそれを同生徒にフィードバックしていけばいいかが明確に分かった。(高校)
- AccuracyとFluency, Rangeのバランスを踏まえた評価に基づき、段階的支援を行うことでライティング技能の自動化を図る具体的方法を学べた。(高校)

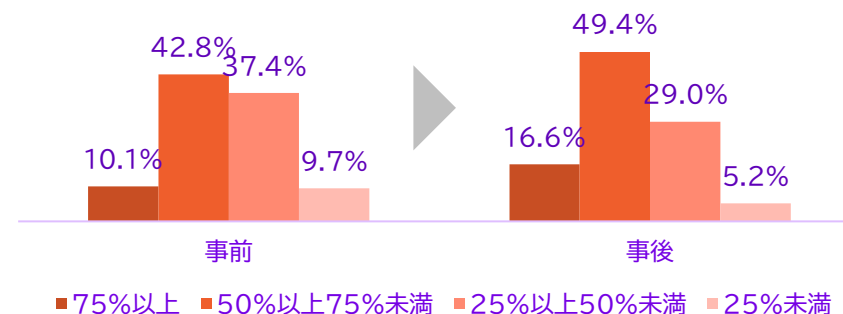
教師の英語使用の量と質

- ❖ 「すべてを英語でする」ことが目標ではなく、生徒の理解と活動量を両立させる視点に移行しました。
- ❖ 「日本語に頼る/減らせない」から、「意図的に使い分ける/必要最小限にする」といった**戦略的な使用**への変化です。「短くシンプルに言う」「段階的に説明する」などの指導方略に触れ、定評のある手法を習得したことで、不安を理由に英語発話を避けることが減りました。
- ❖ 単に「話させる」のではなく、足場をかけ、**負荷を下げながら発話機会を増やす**実践が広がり、生徒の言語活動の時間が増えました。
- ❖ 教師の工夫の積み重ねによって、教室内の言語使用そのものが変化、**教師自身が英語を使うことが、生徒の発話を引き出す、という因果関係への気づき**を導きました。

- 英語中心の授業でも工夫すれば理解に繋がれることがわかりました。(中学校)
- 教員が英語で話すことで、生徒も積極的に発話してくれるようになった。(中学校)

中学校

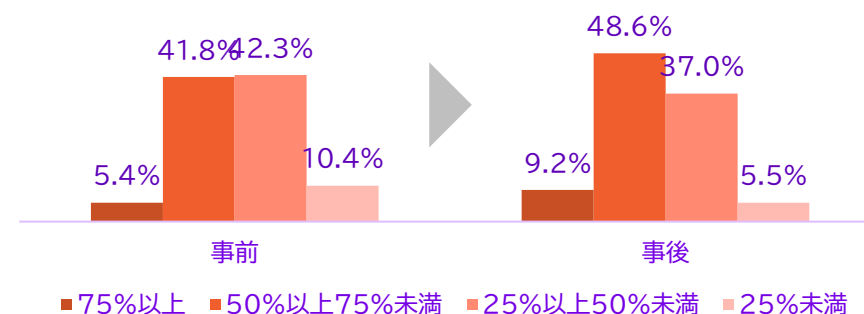
授業中における教師の英語による発話の割合



50%以上の割合

53%→67%

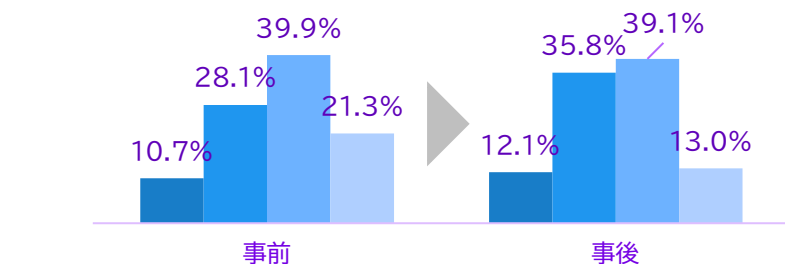
授業中、生徒が英語で言語活動をしている時間の割合



50%以上の割合

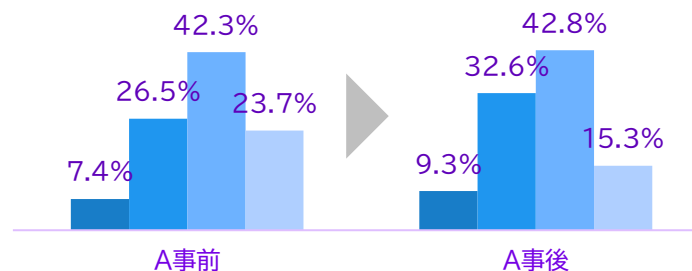
47%→58%

授業中における教師の英語による発話の割合



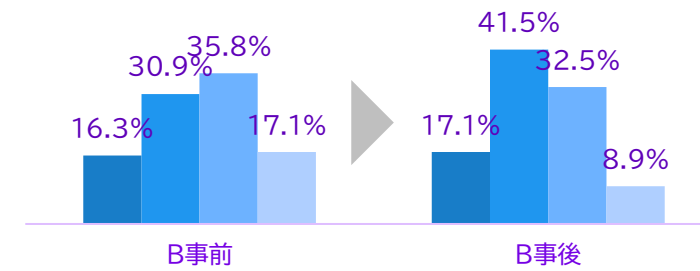
50%以上の割合 **39%→48%**

Aグループ



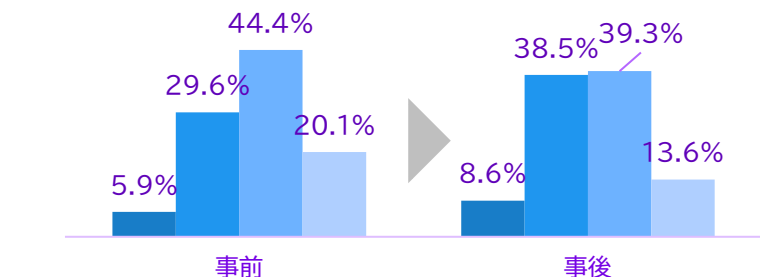
34%→42%

Bグループ

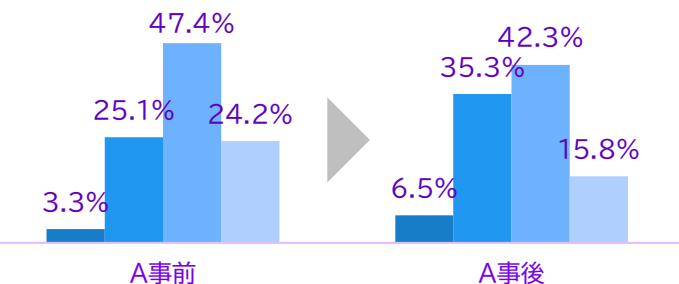


47%→59%

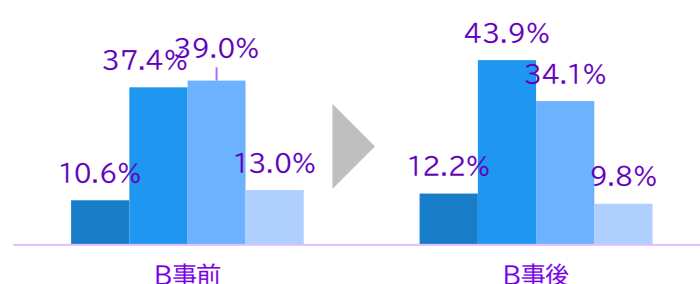
授業中の、生徒が英語で言語活動をしている時間の割合



50%以上の割合 **36%→47%**



28% → 42%



48%→59%

■75%以上 ■50%以上75%未満 ■25%以上50%未満 ■25%未満

高校は、特にAグループの生徒の
言語活動の増加が著しい。

- 言語活動を中心にした授業
に転換できた。(高校)
- 英語使用を意識したことで生徒の
モチベーションが向上した。(高校)

教師も生徒も豊かに英語を使うための 定評のある手法

ライブでのワークショップやeラーニングの動画すべてで、教師が使う「わかりやすい英語」「生徒が理解できる英語」のモデルを示しました。日本の中高生にとって、現実的で効果的である英語の例とともに、そこで使われているテクニックを具体的に示しました。

Grading

- 生徒の理解に合わせて、教師が使う英語を調整します。語いや表現を「短くシンプルに」したり、話す速さを生徒のレベルに合わせることで、生徒の集中力やリスニング力の向上につながります。(逆に、スピードがゆっくり過ぎたり、簡単すぎるのもよくありません！)

Staged Instructions

- 言語活動の説明では、簡潔で必要なことだけをわかりやすく伝えます。「第1に～をして、第2に～をして」というように、簡潔で、段階に分けて、必要なことだけを言うようにします。授業前にリハーサルをすることをお勧めします。

Instruction Checking Questions (ICQs)

- 教師の指示を生徒がどの程度理解したかを確認する質問。教師が英語を使い続けながらも、教師の英語を全員が理解できているかどうかを確認する基本かつ重要な手法。
- 話のポイントを理解したかを確かめる概念確認には、Concept Checking Questions (CCQs)も使えます。

機能言語

- コミュニケーション方略の一環として、相手に働きかけたり、促したりなど場面に応じた、言語の機能に関する表現のモデルを教師が示し、生徒に使うように促します。例えばターンテイキングの場合は、How about you? / What do you think? など。

効果的な日本語使用

- 日英を使い分ける判断基準を紹介。生徒のニーズに基づき教師が意図をもって選択できるため。日本語を使用する方が効率的である場合、生徒の理解を深めるのに役立つ場合などの事例を紹介しました。

(参考) “English Rich”な授業

ブリティッシュ・カウンシルでは、オールイングリッシュよりも、“English Rich”な授業を推奨しており、本研修でもこの概念を重視しました。English Richな授業では、効果的な日本語使用を含め、教師の使用する英語が質・量ともに充実することで、教室での言語活動が活発に行われます。

[English Richな授業づくり](#) | [ブリティッシュ・カウンシル](#)

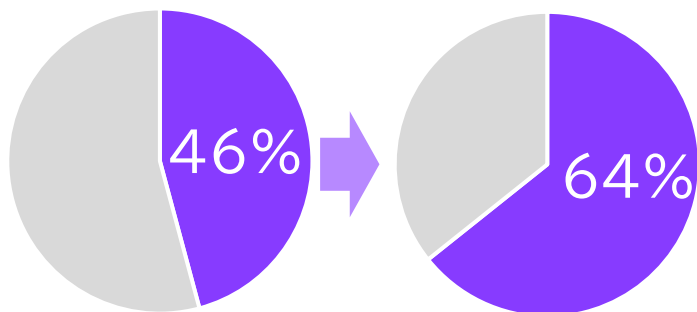


教師の知識と自信

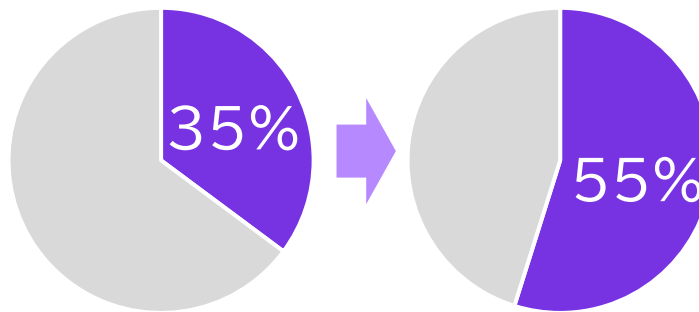
- ❖ 中高共通して、教師の指導に対する知識と自信の両面において飛躍的な向上が見られました。
- ❖ 特に語彙の定着を支える仕組みや効果的な反復練習、段階的指導、フィードバックの役割と方法について理解が深まりました。「何を意図してどのように指導するか」が整理され、これまで経験的に行っていた指導が、**理論に裏付けられた実践へと移行**しました。
- ❖ 中でも大きな変化は、「**指導次第でできるようになる**」という認識への転換です。自分の指導によって生徒の変化を目の当たりにした経験が、教師にとって強力な手応えとなりました。
- ❖ 「漠然とした不安や迷い」が「**具体的な課題認識**」へと変化し、単に「できる」「できない」という大まかなとらえ方ではなく、「どこまでできていて、何が課題かを把握している」状態となり、**根拠を交えて課題を分析的に語る声が多くなりました**。

知識をアップデートし、実践を重ね、成果が見えたことで、指導に対する自信が向上。

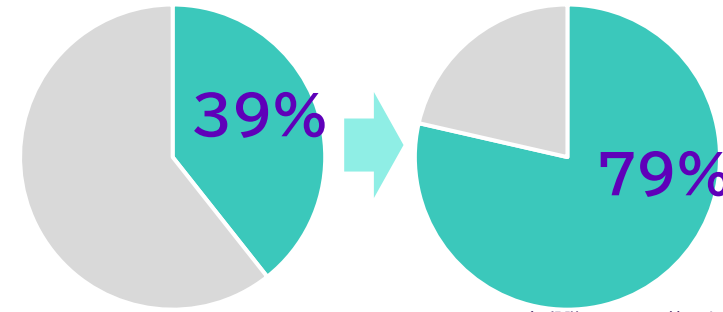
話すこと[やり取り]活動に必要な支援や
フィードバックについての理解



スピーキング指導に自信がある



記憶のしくみや生徒の記憶に残る語彙の導入・定着支援の方法についての理解



(6段階で4-6を回答した割合)

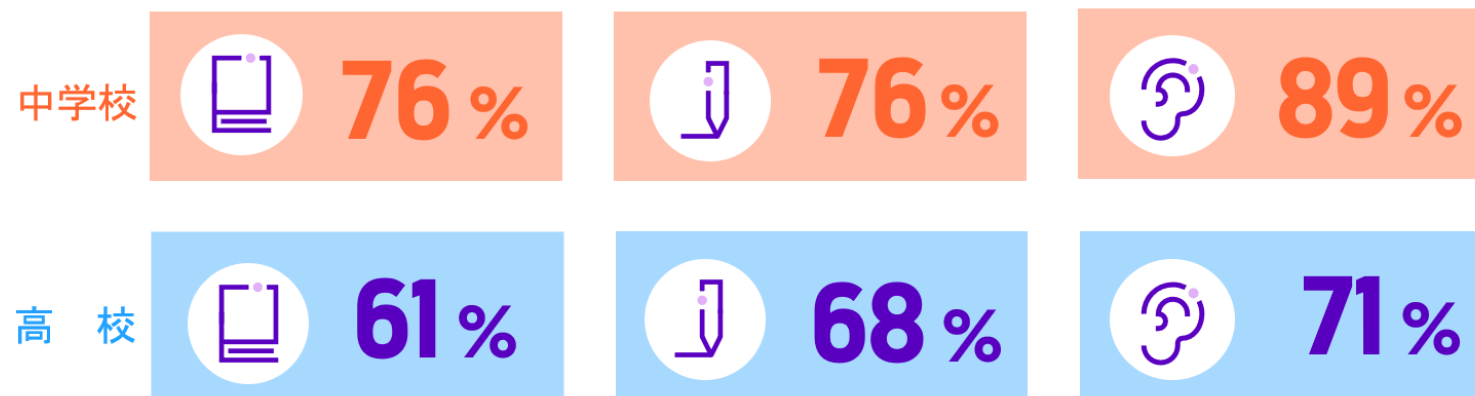
話すことと他の技能との関係： 技能間の影響を実感

話す活動は、「他技能を伸ばす媒介」として、学習プロセスの中核で機能することが示されました。
(体系的、意図的に教師が設計・実践することが重要)

- 【話す→書く】 研修後は「話す→考えを整理する→書く」という流れが強く意識されました。話すことが単なる活動ではなく、思考形成の中核として位置づけられました。書くことの事前活動として話すことを取り入れることで、書く内容の質や量が向上したという声が多数寄せられました。
- 【話す→聞く】 話す活動の増加により、「聞こうとする姿勢が変わった」「聞き取れる語が増えた」という変化が繰り返し報告されました。受動的だったリスニングが、主体的な行為へと転換した点が重要です。
- 【話す→読む】 さらに注目すべきは、「読む力」への影響です。中高ともに理解の過程で重要な働きをするようになり、特に高校では「読む速度が上がった」「構造理解がしやすくなった」など、話すことを通じて言語処理の自動化が進んだことが示唆されました。

話そうとするために、リーディングで表現を知るようになったし、会話を続けるために、相手の話をよく聞こうとするようになった。また、話したことなら、書けるから書こうとする前向きな気持ちが出てきた。(高校 20年以上)

生徒の話す力が向上したことで、生徒の読む/書く/聞く力も向上したと【実感した】教師の割合



(6段階で4-6を回答した割合)

研修と授業改善、生徒の成果につなげるための、**科学的根拠を踏まえた研修デザイン**

- 1) 教室で使える指導技術を科学的根拠や定説となっている理論と共に示す
- 2) 指導のモデルを提示する(あるいは体験する)
- 3) 教師の「学びやすさ」を担保できるプラットフォーム(ラーニング・マネジメントシステム)を採用し、教師の認知負荷に配慮した設計を行う
- 4) 研修と授業を連動させる仕組みを設定する

「足場かけが必要」とよく言われるが、何をどのように行えばよいのかが今ひとつつかめていなかった。

研修動画で授業での展開を見せてくれたことによって、何をどのように、どんな場面で説明をすればよいのか、活動させる前にどんなデモが必要なのか、何を説明して何はあえて説明しないのか、それらを学ぶことができた。

自分が学んだ指導方法を実施し、実際に生徒が話す内容が具体的になったり、話すことに対して抵抗感がなくなっているなど成長した姿を見ることができました。

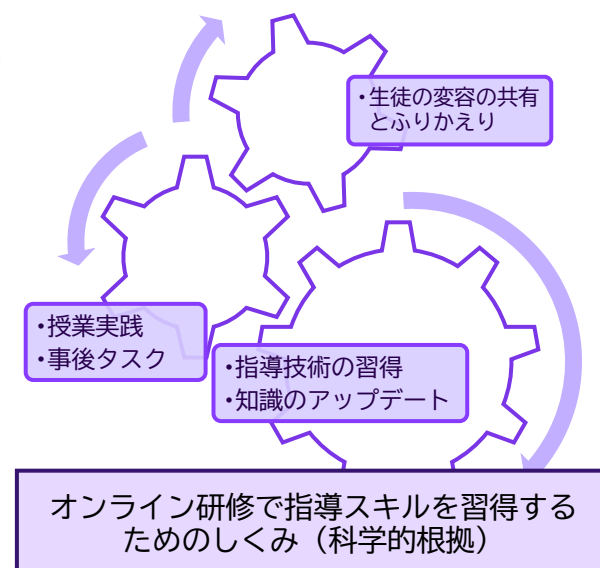
成果報告書及び研修内容紹介



詳細版では、

- 【受講前】にどんな課題をもっていたか、
- 【受講中】どのような研修に取り組んだか、
- 【受講後】どのような変容が見られたのか、
をテーマ毎に概観しています。

また、研修設計についての
情報も掲載しています。



教師が学び続けることが
生徒の学びにつながるという
ことも実感しました。

(中学校受講者)

〔内容〕

- 研修で高まった自信と授業改善
- 話すこと[やり取り]の指導:中学校、高校
- 新出語彙や表現の指導と練習:中学校、高校
- 書くことの指導:中学校、高校
- 教師の英語使用の量と質
- コミュニケーション活動と思考力・表現力
- 話すことと他技能との関係
- 教師の知識と自信を高める学習体験
- 成果:授業改善が起こる循環を再現する
- 課題と今後